

ユ
ー
ゲ
ン
ト
・
フ
ィ
ル
ハ
ー
モ
ニ
カ
ー

JUGEND

PHILHARMONIKER

2022年4月10日 14:00 すみだトリフォニーホール 大ホール

第 16 回

定期演奏会

ごあいさつ

本日は、ユーгент・フィルハーモニカー 第 16 回定期演奏会にご来場くださ
いまして、誠にありがとうございます。

新型コロナウイルス感染症の拡大が始まった 2 年前の 2020 年 3 月、ユーゲン
ト・フィルはこのすみだトリフォニーホールに立っていました。数々
の公演が中止を余儀なくされる中、未知の脅威と戦いながら、我々は最後までお
客様をお迎えしての演奏会開催を模索し続けましたが、残念ながら無観客開催と
せざるを得ませんでした。あの無念はつい昨日のように思い出されます。

感染症が完全に収束したとは未だ言い切れない状況ではあるものの、2 年前と
同じこのトリフォニーホールにて、皆様をお迎えして演奏会を開催できたことを、
団員一同心から嬉しく思っております。

さて今回の定期演奏会では、初共演となる橘直貴先生の指揮により、エルガーの序曲《南国にて》、ドビュッシーの交響詩《海》、そしてニールセンの交響曲第4番《不滅》と、3つの表題のついた作品をお送りします。前半は、作曲者が表題から受けたインスピレーションを、それぞれの熟達した手法により音楽として表現した極彩色の世界が広がります。一方で後半のニールセンの作品では、表題はあくまでシンボルであり、大戦による混乱と苦難の中にいた作曲者が示す意志が音楽を通して表現されます。奇しくも昨今のウクライナをめぐる混乱を目の当たりにしている私たちにとって、その意志は一層強く我々の心に訴えかけます。3人の作曲家が音に託した思いを表現できるよう、団員一同鋭意練習を重ねてまいりました。お客様に伝わるものがあれば幸いです。

最後になりましたが、橘先生をはじめ、本演奏会の開催にあたってご協力いただきました皆様、そして困難な状況下にも関わらずご来場いただきました数多くの皆様に、心からの御礼を申し上げます。今後とも当団の活動に対してご期待とご支援を賜りますよう、何卒よろしく願いいたします。

ユージェント・フィルハーモニカー 代表 湯田 怜央奈

プログラム

E.エルガー：序曲《南国にて》Op.50

C.ドビュッシー：交響詩《海》

— 休憩 20分 —

C.ニールセン：交響曲第4番 Op.29 FS76《不滅》

(終演 15:45 頃)

指揮 = 橘 直貴

演奏中にスマートフォン等でパンフレットをご覧いただけますが、音が出ないように設定の上、画面を暗くするなど周りの方への配慮をお願いいたします。

指揮 橘 直貴

札幌市出身。

1988年桐朋学園大学音楽学部にホルン専攻として入学。1992年同大学卒業後、研究科に進み、1994年より1997年まで同大学の附属機関である指揮教室に在籍する。

この間、指揮を岡部守弘、紙谷一衛、黒岩英臣の各氏に、ホルンを安原正幸氏、チェンバロを鍋島元子氏（故人）に師事する。また、大学在学中



より、シエナ・ウィンドオーケストラに入団、1995年4月まで同団のホルン奏者を務める。大学卒業後から現在に渡り、ウィーン国立音大助教授である湯浅勇治氏の指揮セミナーに参加、師事する。

1999、2001年 ウィーン・マスタークルゼ指揮マスターコースにてサルヴァドール・マス・コンデ氏に、2000、2003、2004、2006年 イタリアのムジカ・リヴァ夏期国際アカデミー指揮マスターコースにてイザーク・カラブチェフスキー氏に、また2001年ドイツのシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン音楽祭指揮マスターコースにてヨルマ・パヌラ氏に師事する。

2001年第47回ブザンソン国際指揮者コンクール・ファイナリスト、ならびに会場内の聴衆による投票にて最優秀である聴衆賞受賞。同年に、オーケストラ・レジオナル・ドゥ・カンヌと、2006年のサンクト・ペテルブルグ・フィルハーモニーと共演。2007年、第2回バルトーク国際オペラ指揮者コンクールにて優勝。

これまでに、東京交響楽団、東京シティフィル、東京室内管弦楽団、札幌交響楽団、仙台フィル、広島交響楽団、関西フィル他に客演、各地のオーケストラ、合唱団やオペラの指揮者として活動。

現在、東京室内管弦楽団のプリンシパルコンダクター、コンセール・エクラタン福岡の音楽監督を務めている。

ユージェント・フィルハーモニー

一般財団法人日本青年館と全日本高等学校オーケストラ連盟の音楽行事（全国高等学校選抜オーケストラフェスタ、全日本高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演、日本ユンゲオーケストラ・ヨーロッパ公演）に参加したメンバーが中心となって2006年3月に創設された。全国各地の高校や大学オーケストラ出身のプレイヤー約80名が集まり、3月の定期演奏会を中心に、福祉施設や普段生のオーケストラに触れる機会のない農村への訪問演奏、地方公演、行楽施設の各種イベントやテレビ番組での依頼演奏など幅広い活動を行っている。音楽的に、そして人間的に成熟した団体作りに励みながら、「アマチュア・オケだからできること（≡プロオケには出来ないこと）」を追求している。



©Ryosuke

今期の活動

2021年

5月15日 依頼演奏：fika（カフェ、茨城県）「土曜の午後のコンサート」

8月1日 特別演奏会・公開リハーサル（杉並公会堂 大ホール）

M. グリムカ：歌劇《ルスランとリュドミラ》序曲

F. シューベルト：交響曲第7番 口短調 D.759 《未完成》

A. ドヴォルザーク：交響曲第9番 ホ短調 Op.95 《新世界より》

指揮＝安齋拓志

11月27日 室内楽演奏会（団内）（豊洲文化センター ホール）

11月28日 川口市立南中学校 吹奏楽部指導

12月18日 依頼演奏：ヒルデモアたまプラーザ・ビレッジIII（介護施設）

「クリスマスコンサート」

12月18日 依頼演奏：fika「土曜の午後のコンサート」

循環する海の音楽

E.エルガー（1857～1934）：序曲《南国にて》（アラッシオ） op. 50

英国の作曲家エドワード・エルガーの演奏会序曲《南国にて》は、1904年、ロンドンのコヴェント・ガーデンにあるロイヤル・オペラ・ハウスで開かれたエルガー・フェスティバルのために書かれた。作曲家の名を冠したこの名誉あるフェスティバルでは、新しい交響曲が披露されるに違いないと噂されており、エルガー自身も当初はそのつもりだった。しかし、作曲のための休暇で訪れたイタリアは天候に恵まれず、規模の大きな交響曲を書くほどのインスピレーションが湧くには至らなかった。

「寒さ、雨、強風に見舞われて何もできません。5日間だけ天気の良い日がありました。そのうち3日間は電車の中で過ごさなければなりません。こんなに晴れた(?)国で交響曲は書けません。コヴェント・ガーデンのためには演奏会序曲を完成させようと思います。」(1904年1月3日、友人アウグスト・イエーガー宛の手紙)

とはいえ《南国にて》では、旅行中に訪れたアラッシオをはじめとするイタリア北西部の土地の情景や印象が、いくつもの美しいモチーフとなって現れる。疾走する冒頭の主題は「美しい環境——せせらぎ、花、丘、雪を頂いた遠くの山々、その反対側に見える青い地中海——から沸き起こる爽快な気持ち」(エルガー)。

続いて木管楽器に導かれてヴァイオリンが奏でる幻想的な主題には、エルガーたちがたびたび散歩に訪れた生活感あふれる村「モーリオ（モーリヨ）」の地名をとって「モーリオ、モーリオ」というリズムがつけられている。

幅広い2拍子へと変わったロマンティックな次の楽想は、聴く者を古代ローマへと誘う。ガリア遠征とその征服を遂げたカエサルたちの勇姿が、今も残るローマ街道の石畳によって思い起こされるのだ。穏やかな3拍子＝現代へ戻ると、羊飼いの歌う美しい民謡「カント・ポポラーレ」をヴィオラのソロ、そしてホルンが奏でる。その後、再び冒頭からのさまざまな主題が繰り返され、主題が入り乱れて華々しいクライマックスとなる。1904年2月末に完成し、3月16日、3日間にわたるエルガー・フェスティヴァルの最終日に、作曲家自身の指揮によって初演された。

C.ドビュッシー（1862～1918）：交響詩《海》

1. 海上の夜明けから真昼まで
2. 波の戯れ
3. 風と海の対話

穏やかな地中海から大西洋へ抜けると、波は高く、海は躍動する。エルガーの《南国にて》とほぼ同じ時期に作曲されたクロード・ドビュッシーの《海》では、彼が目にし、彼を魅了してきた海の印象——絶えず変幻する色、内在するリズム、

飾り気のなさ——が描かれる。この曲に着手した頃、ドビュッシーは友人に宛ててこう書いた。「私が船乗りという美しい職業に就く運命にあったこと、そして運命が別の方向へ導いた [船乗りにはならず作曲家になった] ことを、あなたはおそらく知らないでしょう。それでも、海への真摯な情熱は持ち続けています。」

(1903年9月、友人アンドレ・メサジェ宛の手紙)

1905年3月5日に完成したこの曲は、同じ年の10月にパリで初演された。その後も、旋律と低音のバランスを調整するなど改訂を重ね、1909年の版がドビュッシー自身によって確認された最後の版となった。3つの楽章に共通する旋律やリズムが形を変えて現れる「循環形式」が採られており、その巧みな構成と美しく描写的な楽想によって、ドビュッシーの創作を代表する一曲として愛されている。

C.ニールセン (1865～1931) : 交響曲第4番 op. 29 FS76 《不滅》 (1914～16)

イギリス海峡から北海へと北上し、バルト海へつながる入り組んだ内海にある島々の一つ、フン島にカール・ニールセンは生まれ育った。デンマークを代表する作曲家としてキャリアの頂点にあったニールセンは、1914年夏、デンマーク王立劇場の指揮者の職を辞し、作曲のためにより時間を費やせるようになった。

《不滅》(直訳すると「滅し得ざるもの」)の作曲はこの頃にはじめられている。ちょうど第一次大戦の勃発時にあたる。

不安定な世界情勢がニールセンの創作意欲を掻き立てたのか、彼はこの作品に、まったく新しい形でアプローチした。「新しい作品は、プログラムはなく、それでいて、生命の衝動や生命の表現とは何か、ということを具現化するための作品にしたいと考えています。動き、生きたいという意志を持ち、良いとか悪いとか、高いとか低いとか、大きいとか小さいとかでは言い表せないような、シンプルに『生きるということ』、『生きたいと思うこと』の全てを表現したいのです(…)」(1914年5月3日、妻アンネ・マリー宛の手紙)。

したがって、標題はついているものの、作品が何かを明確に描いているわけではない。楽譜に楽章の区切りは示されておらず、全体が切れ目なく演奏されるが、形式上は一般的な4楽章構成のように、4つの部分に分けることができる。悲劇的な運命を告げるティンパニの強打が印象的な第一主題ではじまる第1部では、短前打音から半音上がるモチーフが執拗に繰り返されるが、このモチーフは作品全体を通して聴かれる。続く息の長い穏やかな旋律の第二主題も、第4部の最後で再び複雑に形を変えて現れる。ここにも、滅びることのない生命、あるいは循環のような思想が垣間見られる。ティンパニと第1ヴァイオリンの静かな移行部によって導かれる第2部は、木管楽器と弦楽器だけの束の間の平穏。フェルマータで引き延ばされたヴァイオリンのユニゾンによって、再び現実に引き戻される(第3部)。シンプルでどこか空虚な旋律どうしの攻防が、入り組んだフーガへと発展していく。ヴァイオリンの速い音階のパッセージとともに第4部がはじまり、2名のティンパニ奏者による決闘のようなかけ合いへとつながる。穏やかな

楽想やティンパニの強奏の傍らで第1部の第二主題が見え隠れするようになり、それが次第に雄大な讃歌へと変容し、幕となる。

数回のスランプを経て完成したこの作品は、1916年2月1日に作曲者自身の指揮で初演された。スコアが完成したのは、そのたった5日前のことだったという。

* * * * *

これまでドイツ語圏の楽曲をレパートリーの中心に据えてきたユーゲント・フィルハーモニカーが、本公演では英国、フランス、そしてデンマークの音楽に取り組む。波のようにざわつく心象や、足元をすくわれそうな浮遊感とともに、「海」や「循環」といった隠れたテーマの潜むユーゲント渾身のステージを、今年も存分にお楽しみいただけることと思う。

中村伸子（音楽学・元団員）